

人類よ起ち上げれ!

ムーンマトリックス

[覚醒篇④] *Human Race Get Off Your Knees*
David Icke

爬虫類人が残した痕跡 ～古代からの伝承～

デーヴィッド・アイク
為清勝彦訳

人類は「爬虫類脳」によって奴らの「蜂の巣心理」による
通信システムに直結されてしまっている!

この惑星地球は、まさに憑依された惑星そのものだ
——爬虫類人は、彼らの「放送局」に
我々をチューニングしたので!!



010

ムーンマトリックス「覚醒篇④」

デーヴィッド・アイク

訳為清勝彦

ヒカルランド

SAMPLE

お待ちかね、蛇とレプティリアン登場！！
—— 覚醒第4弾！ ——

どこまでが「白」で、どこまでが「黒」だろうか？

そう問われ、何らかの答を出すよう迫られるならば、たとえばある人は、真ん中が境であり、左側を「白」とし、右側を「黒」と名付けるだろう。

あるいは、ある人は、人間の肉眼で差がわからない範囲（両端からそれぞれ5mmぐらいか）を「白」「黒」と定義するだろう。

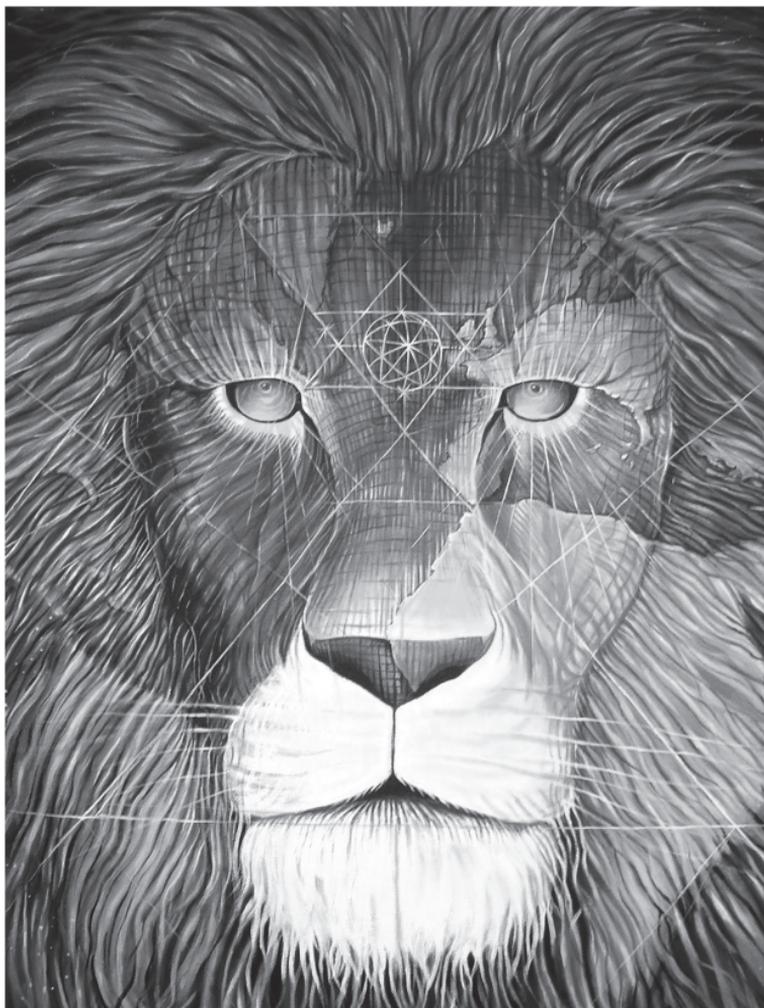
あるいは、左端のごく一部だけ「白」であり、残りは全て「黒」だと言う人もいるだろう。

結局、それを決めているのは、「言葉」であり、人間の「心（マインド）」である。

そして、人はそれぞれに「言葉」を持ち、その「言葉」の違いを互いに争わせている。

レプティリアン
この第4巻からいよいよ「爬虫類人」の解明に入っていく。

訳者 為清勝彦



The lion sleeps no more.

SAMPLE

各巻の構成

【第1巻】我々は通常、自分の身体やものの考え方、自分の名前などをもって「自分」と思っているが、実はそれは錯覚であるということ（第1章）、そして、アイクが1990年に覚醒の旅を始めるまでに辿った人生経験の必然性（第2章）、覚醒の旅を始めて以降、世間から大々的に嘲笑ちやうしやうされることで真の自由を得たこと（第3章）が記述されている。

【第2巻】第4章より、アイクが過去に行ってきた真実の解明の内容が、解明を行った順に（解明に導かれた順に）紹介してある。太古の「黄金の時代」の終焉しゆうえんをもたらした地殻変動（大洪水）の後にメソポタミアの地に出現したシュメール文明。それが、バビロン、エジプト、ローマ、ロンドン（バビロンドン）と変遷し、今日の世界支配ネットワークになった（第4章）。イルミナティの地球規模の蜘蛛くもの巣（ウェブ）、ピラミッド支配構造（第5章）。イルミナティの血筋の中核をなすロスチャイルド家とその金融支配の窓口（第6章）。「ユダヤの陰謀」と言われるが、ユダヤ人はスケープゴートに過ぎない。陰謀を巡らしているのはロスチャイルド・シオニストである（第7章）。

【第3巻】人類支配の基本テクニクである①PRS（問題を作る↓人々に反応させる↓支

配に都合のよい解決策を実施)、②全体主義者の忍び足について、9・11事件、地球温暖化詐欺などをケーススタディにして解説(第8、第9章)。

【第4巻】人間の基本的な行動や感情を支配する爬虫類脳。現在の人類は爬虫類人の遺伝子操作によって創造された(第10章)。世界各地の古代神話・伝説・信仰に共通する蛇崇拜は、現在の悪魔崇拜やさまざまなシンボルとなって受け継がれている(第11章)。

【第5巻】言語に暗号化されている蛇の人類支配を言語学の視点で分析(第12章)。爬虫類人はどこに居るのか?(地下世界、変身のことなど)(第13章)。月は、自然の天体ではなく、工作された宇宙船である可能性を検証(第14章)。

【第6巻】アマゾンの熱帯雨林で聞こえた「声」のメッセージ。愛だけが真実であり、他は何もかも錯覚だった(第15章)。人体をコンピュータにたとえ、宇宙をインターネットにたとえるアイクの宇宙論(第16、17章)。時間と空間という錯覚(第18章)。

【第7巻】月のマトリックス。月からの人類支配の仕組み(第19章)。

【第8巻】ゲーム・プランⅠ人口削減と心身への攻撃(第20～22章)。

【第9巻】ゲーム・プランⅡ世界政府と自由の剝奪(第23～25章)。

【第10巻】ゲーム・プランⅢ社会福祉の正体(第26～28章)と結び。

第10章 えっ？ やつらの正体は何だつて？

筆頭にロスチャイルド家、血に解の含有量多く、ブルードラッド
イルミナティの血筋は、人類と爬虫類のハイブリッド種 16

あなたの中の頭の中にもいるトカゲ——イルミナティほど強烈ではないか…… 19

真実が靴を履いている内に、嘘は世界を一周する
24時間無休で危険を探し続ける爬虫類脳 22

恐怖、キョロフ、恐怖！
生き残りのため性・マナー・権力・食物に妄執する爬虫類脳 28

陰謀の基本——密に人々を恐怖・不安・ストレスにさらしておく
支配・操作は爬虫類脳を通じてなされる 31

典型はブレア元英首相
爬虫類人血筋「私は望むものを得るため嘘をつく。何か悪い」 35

竜座
ドラゴの爬虫類人（過酷）が最も冷酷で暴力的破壊的 37

人類は彼らのエサ！^{レフテイリアン} 第三三密 爬虫類領域外の「次元間存在」^{第四密 度} 41

爬虫類人が人間界で活動するには吸血が必須^{惑魔 崇拜} 44

爬虫類人の遺伝子的な乗り物がハイブリッド血筋 45

「エデンの蛇」はサーバンント。^{ヘライ直立奉行！} スネークではない 47

「ノアの箱舟」原典は、エンキガキルガメツシユに命じた事蹟^{アーク} 51

アメリカのイラク侵略目的は古代文明隠したつた！^{略奪} 53

突如出現！ 全盛文明——シユメートルにも、そして爬虫類シユメートル語^{ギナアブル} 54

遺伝子操作↓繁殖↓人口調整↓管理人配置^{奴隷人種の創造} 57

カインの呪い——「カインの息子たち」を自称するイルミナテイ 62

アダムの人種——アヌンナキと人間のDNAを結合^{あえて欠陥種に!?} 68

おとなしく従う——爬虫類脳に頼る限り 72

点と点を結んでいく——「失われた環」がないのは当然！^{数次の遺伝子操作} 75

「地球外のプログラマー」が創造した「人間のジャンクDNA」 81

爬虫類人の 男女別性器と性的コロンを人間に与えた爬虫類人
渡来以前、地球人は「あの世」と交流する両性人間 83

「脳の進化の大爆発」は超高速！(カール・セーガン)
そうじゃないよ、チャーリー(ダーウィン) 85

フアシスト的！
人種差別、殺人光線、空飛ぶ円盤、「第三の目」を持つナーガ 爬虫類人 86

「蛇の子供たち」の正体空飛ぶ爬虫類人を伝えるクレド・ムトウワ 90

「神々」の核戦争——克明な描写が「マハーバーラタ」に 99

完全な破局を防ぐためエネルギーが地球から引き抜かれた
ハイアトランティス水没 104

大惨事を宇宙船で退避の爬虫類人種が戻ってきた！ 105

小惑星帯太陽系は「蛇」地球外生命体の地上基盤が……の呪い 106

火星——木星間「マルデック」の破壊と「火星の呪い」 110

世界の王族は全て「蛇の神々」指図する仲介者憑依の半神 110

ムー大陸のナーガは、白人(アーリア)と交配し、半人半蛇の黄帝インド、中国、チベット、日本へ 117

「竜の王室の結社」蛇のブラザーフッド員フアラオに塗られるメッセ(メシア) ワニの贈物 救世主 117

黄金時代
まさに楽園——生老病死なし、不食もOK、争いなし
118

120

120

118

117

117

110

106

105

104

99

90

86

85

83

第11章 蛇崇拜

人間の生命エネルギーを吸引し、生け贖を求め、悪化する
宗教団体、秘密結社、悪魔組織は「蛇の神々」を崇拜する 126

大輪月ト喜もならむニシキヘビ竜男根ナীগケラルコトドレシ
最古より世界中にあふれる蛇崇拜 131

「アマルカ」がアメリカに
「羽毛のある蛇の土地」——蛇人種が来たりて樂園を分割・支配 138

セミラミス、アルテミス、ヘカテ、デヴィエ
女神は全て蛇、ダイアナ妃の人生全体が儀式 142

蛇の女神エウロパの共同体(ユニオン)がEU 151

三股「体ビラミッド」を
共通の起源——ニムロド、タンムズ、セミラミス 157

サターンの
土星由来の黒い安息日(サバス)、エリート、選挙月由来 162

イエス以前の世界中の太陽神、オシリス、ホルス、ミトラ、バガス、タンタ
冬至に死去し、3日後に誕生 163

罪、罪人の起源は月の神、アラール 166

チアセイス、ティツク
一神教とは、月神教、シナゴグはシン・アゴグ 172

父なる神、ヤハウェ、アラリ、キリスト、クリシエナ
同じ手口——全て爬虫類人の象徴的合成 173

爬虫類人 根源意識から切り離され
イルミナティに心を支配され、人は宗教に走る 階層に安住! 176

「神を畏怖せよ」と脅迫!
心を監獄に閉じ込める宗教 178

ヒッピー世代の「ニュー」エイジ宗教は新しくない 根源意識に近付けない 181

やはり出てきた「蛇の血筋の者たち」 ジエティョエダイ 186

「つであること」を複雑にすることはない!
バカバカしさを解さほぐす 190

心の宗教——複雑性と階層構造 錯覚の「世界」に寄生する詐欺師たち 階層なセイルストーク—愛元思いやり 197

「神々」の「宗教」は生け贄・吸血の悪魔崇拜 爬虫類人 サケニズム 200

「神々々への供」 エグゼクティブ 物「極上品は」若い処女 生け贄の祭儀 エネルギ 思春期前の子供 207

世界的著名人全員集合!
ロスチャイルドの儀式——絶大な心霊・秘儀 F R B 議長を長年務める パワーのグリーンズパン 211

「女の後の存在悪魔」
リリス一覽——セミラミス、カインの母、父はサマエル コルンバ、鳩、蛇 吸血鬼の母、「赤緋色の女」、梟梟 フクロウ 217

爬虫類人の吸血鬼——現エリザベス女王と血縁! ヴラド・串刺し公 226

付録Ⅱ あるサタニストの告白

「死臨終の床終の告白」で知る悪魔崇拜サタニズムの深刻な社会浸透 232

第一部

孤独な大学生1970年代が眩惑的悪魔世界サタン教会の毒にどっぷり漬かる 235

タイフオン暗黒会悪魔主義者アントン・ラツエイやビンダーに特選された淫欲の17歳！の高位の女司祭リリス 239

66%を非識字者に、人口70%を駆除国連ではキンシンジャが尻力！が狙いのアルファ・ロツジ 243

悪魔崇拜の聖者ノーマン・リンゼイ修道会祭司オーストラリアの芸術家・作家 246

「緊張シリアルを生け替に仕立て上げる技術のテクニク」を編み出したキンシンジャー 247

シールが安住の「前衛的小児性愛エンターテインメント」支配を反撃せず！ 児童ポルノ専門高画質ビデオ・DVD 250

「セックスとエロチシズム世界が悪魔崇拜に乗っ取られていること！の合成物」は真実を伝えない 252

「神若々と進化するキリスト教破壊の「左手の道」1980!よ、二度と司祭に私を強姦させないで！」運動 256

世界華道にヴァチカンの主要都市にある地獄生け贖の場の神殿 258

アレクシア・ケイジ、モニカ・フィオナのおかけ システムの男
トイレ・セックス万歳!! サタン万歳!! 261

第二部

あらゆる奇怪な性器結合小児性愛者の天国とトイレ芸術ピデオなどの探求が奨励される 267

我々の時代は、暗闇公然と悪魔崇拜、ボルノ映画帝国、コカインが芸術に!の神秘の愉悅サタンがあふれ出る 269

従順な群れサタントツプサタンに悪魔崇拜階級、底辺に徹底的な奴隷
かくて永劫なるピラミッド社会に、怖がることはない!

第10章

えっ？ やつらの正体は何だったって？

イルミナティのことを知りたければ、爬虫類を研究なさい。

クレド・ムトウワ

筆頭にロスチャイルド家、血に銅の含有量多く、ブルー・ブラッド
イルミナティの血筋は、人類と爬虫類のハイブリッド種

次に私が解明するよう導かれた事実には、私自身、本当にシヨックを受けた。この話を初めて聞く読者であれば、間違いなくシヨックだろうと思う。コンクリートのように硬い心（マインド）のマスコミは、この話題を理由に私を嘲笑（ちやうしやう）する。「陰謀研究」の分野の人々でも、この話題に関しては、私を嘲笑する人が多い。だが、私は気にしない。あるがままを述べているだけだ。

1996年にアメリカを3か月間旅行し、わずかな人数の聴衆を相手に講演していたとき、血筋は、爬虫類の生物種から遺伝子的に派生したという情報に、あちこちで遭遇（そうぐう）するようになった。あなたの読み間違いではない。確かに私は「爬虫類」と書いている。私は全ての可能性を受け入れるつもりであり、プログラムされた心（マインド）からするとバカげていると思えても、それだけを理由に却下（きやつか）したりはしない。だが、初めて爬虫類とのつながりのことを聞いたときには、さすがに「何だっけ？ もう一度、ゆっくり言ってくれ」と思ったのも事実である。

私はいつもすぐに理解・消化できないことに出くわしたときにする行動を取った。その話題は棚上げにし、もっと意味が分かる形で追加の情報が現れるまで（あるいは現れなくと

も)、うやむやなままにしておいたのである。すると本当に現れた。それも、1年後に次のアメリカ旅行を終えると、勢いを増して次々に現れたのである。

1997年の15日間に、米国各地で会った12名の人々から、爬虫類的存在に直接会った経験、もしくは、家族や友人から聞いたという話を聞いた。その後も何年にもわたり、このテーマは常に私に付きまとった。それはまるで「OK、では次のステージに進もう。これを見よ」と言われているようだった。1990年以来、私はこうした経験を頻繁ひんぱんに繰り返していた。新たなテーマが私の人生に入り込んできては、全方位から一斉射撃が始まる。いつも探しに行かなくとも、私に向かってやってくる。

それによって、私はさらに嘲笑を浴びることになるが、それが何だ。実際に起きていることなのだから、知っておく必要がある。さまざまな人から得た情報とテーマには一貫性があり、あまりにも説得力がある。人々に簡単に信じてもらえないという理由だけで無視するわけにはいかない。嘲笑や非難を受けないようにと、プログラムされた認知や「標準」に従って行動・言論するだけならば、何も変わることはないし、前進することもないのである。なかろうか。

イルミナティの血筋は、人類と爬虫類を交配したハイブリッド種であり、世界中にある古代の伝説や言い伝えに記録が残っている爬虫類的な人間(ヒューマノイド)の子孫であると

いうことに、私は確信を持つようになった。ロスチャイルド家など血筋の家系ネットワークは、絶えず執拗しつように相互交配するが、それは彼らの「特別な遺伝子」を維持するためであり、一般人と交配すればすぐに薄まってしまおうのである。

研究者のスチュワート・スワードローは、米政府のマインド・コントロール計画に拘束された境遇から、爬虫類人（レプティリアン）のことを発見し、爬虫類と人類のハイブリッド血筋が、王族や貴族のことを示す「青い血（ブルー・ブラッド）」という言葉の由来になったと言っている。彼によると、ブルー・ブラッドたちの血には、銅の含有量が多く、酸化すると青緑色になるという（詳しくはスワードロー著『地球を支配するブルーブラッド』、爬虫類人DNAの系譜』徳間書店を参照）。人間社会を秘かに支配している爬虫類人種は、我々のいる次元と隣接した次元に存在しているが、可視光線の範囲を超えているために我々には見えない。だが、可視光線の領域に出入りすることは可能であり、爬虫類人の「都市」や基地が地球内部にある。軍の最高機密の地下基地には、それとつながったものもある。ロスチャイルド家のようなハイブリッド血筋は、地球表面と可視光線の範囲内で、爬虫類人の計画に奉仕している。

服従、執念、崇拜、強情、強欲^{e.t.c.}
あなたの頭の中にもいるトカゲ——支配、所有欲、性暴力^{e.t.c.}
イルミナティほど強烈ではないが……

人々は自覚していないが、全ての人類には、爬虫類の遺伝子があり、人間の行動に基本的な役割を果たしている。「フェロモン」は、同じ種の動物が互いに仲間を認識できるように分泌・放出される物質であるが、人間の女とイグアナのフェロモンは化学的に一致している。また、人間の背骨の基底部には尻尾の名残^{なごり}があり、尾が付いた状態で生まれる場合（医学では「尾肢^{びし}」という）もある。それだけでも爬虫類との関係が分かるだろう。多くの場合は、生後すぐに尻尾を除去するが、貧しい国で医療が受けられない場合には、尻尾の付いたまま生涯を過ごす人もいる。人間の脳の主要部分のことを学者は、「R複合体」つまり「爬虫類脳」と呼んでいる。

爬虫類脳は、人類が歴史的に爬虫類の遺伝子を持って発生したことを最も分かりやすく伝えるものであり、人間の行動にも極めて大きな作用をしている。かなり多くの割合で、人間の行動は、爬虫類脳そのものである。

人間の爬虫類脳は、人間の動物的な願望・反応の拠点であり、トカゲなど爬虫類の脳とほぼ同一である。鳥類も、爬虫類から進化したという説があり、爬虫類脳を持っている。学者

によると、この爬虫類脳が、人間の神経系の中核であり、攻撃、冷血にして儀式的な行動、操作したいという願望、権力・所有欲（縄張り意識）、強い者が正しい、支配、服従、衝動、執念、崇拜、強情、社会の階層構造を求める願望といった性格・形質に関与している。

イルミナティ血筋の家系と彼らが築いた社会の性質が、この爬虫類脳の特徴と完全に一致しているのは、偶然だろうか？ 私は偶然とは思わない。研究者のスキップ・ラージェントは、R複合体についてインターネットに記事を書いている。

少なくとも人間行動の5つは、爬虫類脳に由来している。厳密に区別せず、単純化して言えば、強迫観念的な行動、日々のプライベートな儀式的・宗教的行動、旧来のやり方に隷従れいじゆうすること、儀式の再演、法律、宗教、文化などの分野で見られるように先例に従うこと、詐欺さぎのあらゆる手口といった人間活動として現れている。

これもまた、血筋と彼らが作った組織の行動を完璧に表現している。爬虫類の遺伝子は、彼らの冷血な行動、毎日のように発生している大量の犠牲者に対する同情心の欠如の源でもある。人種差別、他の人種に対する優越感、爬虫類脳に由来している。イルミナティ血筋が娯楽としている攻撃的・暴力的な性行為も同様である（私が他の著作で暴露しているイル

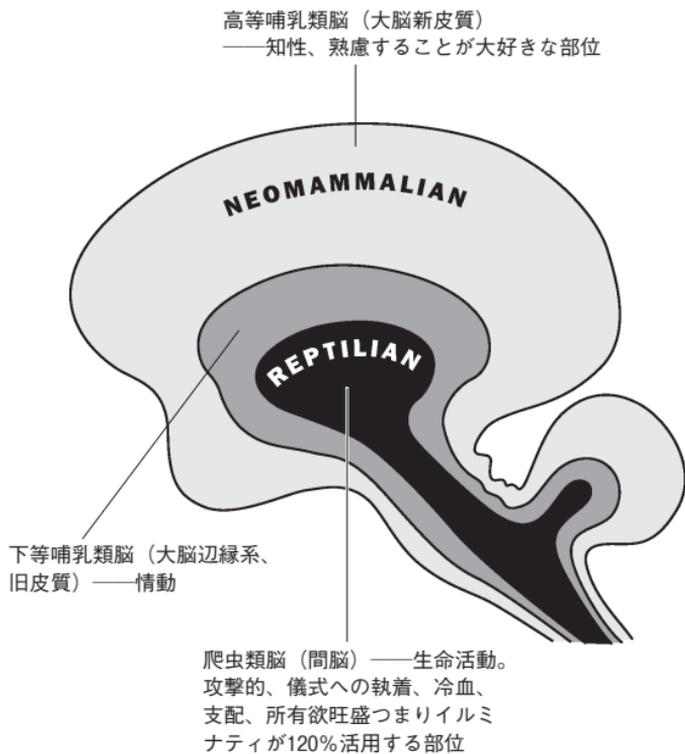


図83 爬虫類脳 (R複合体) は、人間の行動・認知に最も強い影響を与える部位である。爬虫類脳は考えるより「反応」する。

ミナテイの人物を見ていただきたい)。

爬虫類脳は、視覚イメージを通じて交信するため、イルミナテイは、彼らのシンボルとロゴで世界を埋め尽くしている(これについても私の他の著作で詳述している)。イルミナテイに爬虫類脳の全形質が見受けられるのは偶然ではなく、彼らが爬虫類とのハイブリッド血筋であることを示す証拠も存在する。宇宙学者のカール・セーガンは、言っていることより遙かに多くのことを知っているが、『エデンの園の龍』(邦訳『エデンの恐竜』秀潤社)でこう述べている。

特に儀式的な行動、階層を好む行動はそうだが、人間の性質にある爬虫類の要素を無視すると、何もよいことはない。反対に、このモデルを活用すれば、人間の正体を理解するのに役立つ可能性がある。

真実が靴を履いている内に、嘘は世界を一周する
24時間無休で危険を探し続ける爬虫類脳

これから爬虫類の遺伝子が人間の行動にどのように作用するか述べていくが、こうした作用は、爬虫類の遺伝子コードが遙かに多く注入されているイルミナテイ血筋においては、ず

つと強いことを忘れないでほしい。

爬虫類脳は、考えるというよりも、「反応」する。「脳を使わずに行動する人だ」などと言うが、それは正確に言うとは、大脳新皮質という熟慮することが好きな部位を使うことなく、爬虫類脳だけで反応している状態を指しているのである。

爬虫類脳は、身体反応的な感情と生き残り反応の本拠であり、脳の中央に位置する扁桃体（大脳辺縁部にあるアーモンドの形をした神経細胞の塊）と密接に関係して機能している。これらの部位がパニックのボタンを押すと、人は理性と落ち着きを失うことになる。助けを求め。しかも緊急にだ。危機に直面して、逃げるか、戦うか、凍りつくかという反応（心理学者は攻撃・逃避反応と呼ぶ）をするとき、我々は爬虫類脳を使っている。爬虫類脳は、常に周囲の環境を窺って危険がないか検査し、それに従って反応する。認知した危機に打ち勝つことができるかと判断すれば戦うし、勝てないと思えば逃げる。身体を恐怖で凍りつかせることもある。動くことで侵略者の注目を集める危険な状況では、動かないでいることが有利であるが、これは動物の習性と関連した反射応答によって引き起こされる。

爬虫類脳には、二つの状態がある。安全な状態と、安全でない状態であり、その中間はない。爬虫類脳が、安全と感じ、くつろいでいるときは、新皮質も平穏でいることができ、「正常な思考」（少なくとも、より正常な思考）ができる。爬虫類脳が、脅威を感じ、安全で

ないと思えば、イギリスのテレビ・コメディ『ダッズ・アーミー』のジョン伍長のような反応をすることになる。「パニックになるな！ パニックになるな！」と走り回って叫びながら、まさに自分がパニックに陥っているという状態である。

研究や実験で示されているように、恐怖に負けると、恐怖は伝染する。ドイツのデュッセルドルフ大学の研究者は、49人の学生被験者の脇の下に綿パッドを当て、大学の試験を受けたときと、運動用の自転車に乗ったときの汗を採取した。そして、別の学生たちに、綿パッドの臭いを嗅がせて、MRIスキャナーで脳をモニターした。彼らは、「パニックの汗」と「運動の汗」を嗅ぎ分けることはできないと言ったが、彼らの脳は識別していた。パニックの汗は、感情と同情を扱う脳の部位を動かした。「恐怖の臭いを嗅ぐ」というが、これは実際にあることで、恐怖は振動的に伝わり、爬虫類脳の導くままに大衆パニックを生み出すこともある。

爬虫類脳は、生き残れないかもしれないという恐怖から生じた感情反応で、新皮質の思考を圧倒する働きをする。「頭の中が真っ白になる」というのは、このことだ。頭を爬虫類脳に明け渡してしまうのである。生き残りという場合、肉体的な生き残りだけを意味しているのではない。爬虫類脳は、現状の地位、権力、評判、優位性、知能の卓越、自意識などを守ることも、生き残りの仕事と解釈する。科学者、歴史家、宗教信者が、彼らの硬直的な考え



図84 我々が恐怖と生き残り本能に負けてしまうならば、我々の認知、反応、人生は、爬虫類脳に支配される。

方を崩すような新しい情報や考え方を攻撃的な態度で拒絶するのは、彼らの爬虫類脳が活性化しているからである。というよりも、爬虫類脳が彼らを動かしているのである。生き残りメカニズムが作動したのだ。

いわゆる「懐疑派」の人々も同じで、彼らは、自らのコンクリートのように固まった認識と一致しない情報や考え方を中傷するのにも夢中である。これも恐怖の一種である。間違っていることの恐怖、自分が思っていたような世界でないことの恐怖であり、この意味で、懐疑派も完全に爬虫類脳の奴隷である。「懐疑派」というのは、言葉の通り、疑う人々ではない。最初からただ単に、自分の意見とは違うというだけの理由で、他の人の意見を崩すことに決めている人々である。これも爬虫類脳の生き残り反応である。

多くの人々は、「ものごとの在り様」について固定的な見方をすることで、安心感を得ている。宗教、科学、政治、「教育」、医療、あらゆる分野でそうである。このように何らかの方法で現状が脅かされると、爬虫類脳はそれを征服すべき危険と読み取り、「敵」と認知した者を潰すか（宗教や科学界の迫害のように）、新しい考え方を無視して、あたかも存在しないようにふるまうのである。

爬虫類脳は、我々が「時間」と呼ぶ領域で作動しないため、記憶と現在の経験を区別することができない。安全を脅かされた状態に関連する記憶を持っていると、爬虫類脳は、今そ

れを経験しているかのよう^にに反応しようとする。恐怖を感じるようなことを考えると、それが現実^にに起きて^{いる}かのよう^にに身体が反応するだろう。夢を見て、汗をかき、叫んだり、身体が「凍りつく」経験をすることがあるが、これは爬虫類脳が、現実と想像の区別を知らないからである。

爬虫類脳は、ただ反応するだけであり、よく考えてみる必要もなく、光のようなスピードで反応する。熟慮するのは、新皮質であるが、R複合体よりもずっと反応するのが遅い。昔の格言に（マーク・トウェインの言葉とも言われる）「真実が靴を履^はいている内に、嘘は世界を一周している」とある。爬虫類脳と新皮質についても同じことが言える。

爬虫類的な反応による行動は、冷静な思考が始まる以前に、結果を出し終えていることもある。爬虫類脳のトカゲ、蛇、鳥が、どれほど素早く危機に反応できるか見てみるとよい。反応システムそのものである。爬虫類脳は、呼吸を制御し（そのため、恐怖や感情が昂^{たか}ると呼吸が乱れる）、消化（ストレスの胃炎はこのため）、排泄（恐怖で漏^もらしてしま^う）、体温（いずれも恐怖、危険、感情によって根本的な影響を受ける）、動作・姿勢・身体のバランス（このため、身体の動きから感情の動きが読み取れる）を制御する。爬虫類脳は、休眠することがない。24時間無休で危険を探し続け、あなたが眠りに落ちても呼吸を維持している。

恐怖、キョーフ、恐怖！
生き残りのため性・マナー・権力・食物に妄執する爬虫類脳

爬虫類脳は、間違いから学ぶことはなく、恐怖と生き残りを基盤としてもともとプログラムの誘因トリガーに反応するだけである。即座に反応するため、後で悔やむような行動になることもある。爬虫類脳が制御不能になると破滅的になり、激しい夫婦喧嘩から世界大戦まで何でも引き起こす。

爬虫類脳は、言葉ではなくイメージで通信するため、広告代理店の狙いねらも爬虫類脳にある。特に性的なイメージを使ったものはそうである。爬虫類脳の生き残りプログラムの一部に、交尾の相手を探して、種を繁殖させることがある。性欲の源、そして、性的刺激によって行動が操作できる理由は、爬虫類脳にある。いろいろな広告を見れば、いかに性と生き残りのテーマが無数の形態で充満しているか分かるだろう。その意図は、できるだけ早期に爬虫類脳を刺激し、幼い子供であっても爬虫類脳が支配的な状態にすることにある。性的な意識の目覚めが若年化の傾向を辿っているのは、このためである。

血管が設立・支配している国連は、5歳の幼い子供に性教育を義務付け、自慰や「性暴力」といった話題を教えるよう推奨すいしょうしている。この勧告は、ユネスコの報告に含まれてい

るが、そこには、5〜8歳の子供たちに、「自分の性器を触ったり擦こすったりすることを自慰」と言い、その陰部を「自分で触ると気持ちよくなることができる」と教えるように記述されている。「責任あるカリキュラムを求める市民」団体のミシエル・ターナーは、「どうして子供たちが子供らしくあってはいけないの？」と疑問を投げかけている。その答えは、陰謀団がそれを望んでいないのだ。

マナーに関する問題も、やはり爬虫類脳である。マナーが世界の社会を支配しているという前提を置けば、当然ながら、爬虫類脳は、マナーと生き残りを同一視する。十分にマナーがないことに恐怖を感じ、必要以上であってもマナーを多く持つほど生き残りのチャンスという意味では良いことになる。人生を何回も送るのに十分なマナーを持っていながらも、まだマナーの蓄積に夢中になる人がいる理由の一つはここにある。

そして、もちろん、マナーは、権力を行使し、人々を支配するためにも利用可能であり、実際に利用されている。この支配欲も、爬虫類脳の形質の一つである。これもやはり、他者に対して権力をたくさん持つておくほうが、生き残りの可能性が高くなると捉とらえているわけである。食べ物も同様である。我々が認知する通り、十分な食べ物を確保することは、明らかに生き残りのために基本的なことであるが、これも爬虫類脳の役割である。マナーでも十分な量よりも多く確保するほど生き残りのチャンスが増すが、食べ物についても、抑制でき

なくなった爬虫類脳の原始的な生き残り本能のために、多くの人は遥かに食べすぎている。食糧不足のときに食糧を求めて互いに争っている人々は、まさに爬虫類脳が絶好調の状態にある。

「怒鳴り合いの喧嘩」は、爬虫類脳が知っている唯一のコミュニケーション手段を使っている状態である。凶悪犯やいじめっ子は、爬虫類脳の操り人形である。独裁者や暴君もそうである。車を運転中のイライラや暴行の原因もここにある。前に割り込まれると、R複合体が、縄張りを侵害されたと解釈して反応する。また、爬虫類脳は、eruptingmind.com というインターネットの記事に書いてあるように、自己像と「地位」の要求を結び付けることもする。

確実にあなたの外見を良くしたり、健康に良いと言われるものは、爬虫類脳にとって刺激となり、爬虫類脳は、偏執、強迫行動、支配、自己維持といった反応をする。衣服、靴、ビタミンを買うのに夢中になり、容姿に固執する人がいるのは、そのためである。こうした商品の宣伝を見ると、どれも非常に魅力的なことに気付くと思う。いったいどうしてだろうか？

性を利用すれば売上アップにつながるため、魅力的な人々が使用される。性を利用するもう一つの理由は、あなたを不十分な人間だと思わせることにある。宣伝に使われて

いる人々よりも、自分自身が魅力的でなく、富も権力もないとすれば、特にそうだ。こうして、敵意、嫉妬、屈服、もしくは、競争してみようという願望が刺激されるのである。

商品を購入することで、あなたの無意識にして非合理的な脳は、商品の購入と、それを宣伝していた人を結び付ける。宣伝に著名人がよく使用される理由の一つはここにある。その著名人が備えているものが、その商品と一緒にあってあなたの手に入るという錯覚を抱かせるのである。

陰謀の基本——常に人々を恐怖・不安・ストレスにさらしておく
支配・操作は爬虫類脳を通じてなされる

ほとんどの商品広告、政府発表、工作された事件は、爬虫類脳を標的にしている。それは、脳の辺縁部と扁桃体と密接に動く。脳の辺縁部は、別の方法で感情を処理し、記憶に結び付ける。このため、我々は感情に結び付いた出来事は記憶していることが多い。食べることやセックスなどの生存本能は可能な限り楽しいものにして何度も繰り返すようにし、片や生き残りを脅かすような行為は、可能な限り不快で苦痛なものにすることで、爬虫類脳の生き残り要求を支援するのである。幸いなことに、辺縁部は、爬虫類脳ほど完全に反射的ではなく、

経験から学ぶ力を持っている。

これについてさらに深く検討する前に、現在の地球社会が支配・操作されている仕組みについて考えてみたい。それは爬虫類脳を通じてなされている。私が、PRS（プロブレム・リアクション・ソリューション）と呼ぶテクニクは、ほとんど全てが爬虫類脳の生き残り反応（リアクション）を活性化することで成り立っている。それは、恐怖や危機感を煽^{あお}つて爬虫類脳を「問題」に対して反応させ、危機から救済してくれる「解決策」に心を開かせることに尽きるのである。「何ということだ。どこもかしこもテロリストだらけだ。私の自由を奪ってくれ。マイクロチップを埋めてくれ。どうしたらよいか教えてくれ。何でも言う通りにする。私を救ってくれ」という具合にである。

このため、陰謀の基本は、人々を恐怖、不安、ストレス、悩みの状態に常におくことになる。これらはいずれも「危険」の現れであり、爬虫類脳の反応プログラムに我々を拘束するものである。これは人間の経験のあらゆるレベルで起きている。配偶者を失う恐怖から、仕事や家を失う恐怖、自分や他の人が死ぬ恐怖、神や悪魔の恐怖、ハルマゲドンの恐怖に至るまでさまざまである。何らかの理由で（肉体的な理由、金銭的な理由など）生き残りできないという恐怖に襲われた場合、人々は自らを守ってくれると信じる人や物に、本能的に力を明け渡してしまう。これを行っているのが、爬虫類脳である。

世界が、ピラミッドの中のピラミッドという多重階層になっているのは、まさに爬虫類脳であり、何十億もの人々が、このピラミッド構造の中で自分の位置付けをわきまえて、その階層構造に従属しているのも、爬虫類脳のなせるわざである。権威ある人（上司など）がやってきたり、逆にあなたを呼び出したらどうだろうか。多くの人は、程度の差はあれ、何らかの恐怖に関係ある感情的な反応をするだろう。アメリカの「人間関係セラピスト」のケイ・ス・ミラーは、爬虫類脳と人間関係について非常に興味深い記事をインターネットに書いている。彼は考察している。

権威ある人が部屋に入ってくると、周囲の環境をチェックしている脳の部分が、危険信号を爬虫類脳に送るだろう。たとえその人と比較的良好な関係を築いていたとしてもである。多くの人にとって、上司に対し、次の3つの行動以外を取ることは難しい。①対戦する。上司や同僚の言うことに対し、内容が何であれ、「論理的」に同意しないと、いう形態を取ることが多い。②逃げる。通常は、本当に自分が思っていることを言わず、感じていることを表に出さないという回避行動に逃げ込むことになる。③凍りつく。いつもは知的で魅力的な人が、「脳死」状態になる。

王制に賛成していない著名人が、女王の前に出ると「脳死」状態になり、いつもなら冷笑的に批判している相手に従順な態度を取るといふ話を聞いたことがある。これもまた、究極の権威の象徴を前にして、危険を感じした爬虫類脳が反応し、階層構造に復帰し、「自分の立場をわきまえている」状態である。

オバマの選挙活動でデーヴィッド・アクセルロッド（ロスチャイルド・シオニスト）たちが、標的にしたのも爬虫類脳だった。全米で演説したオバマの聴衆の反応は、新皮質から出たものではない。新皮質の反応であれば、話に耳を傾け、その内容を考え、質問し、もっと詳しい内容を知りたがる。そうではなく、「変化」「希望」「我々にはできる」「信じるべき何か」といった爬虫類脳から出た感情的な反応だった。

チベットの秘教では、破壊的な感情のことを「我々の現実認識を歪める状態」と定義している。これがまさに制御不能になった爬虫類脳が行うことであり、人間を支配するために爬虫類脳が重要な鍵を握る理由でもある。この一文の意味の重みは、本書を読み進めていくほど明らかになっていくだろう。ここではまだ表面を引っ搔いている程度に過ぎない。

チベットの秘教では、破壊的な感情のことを「過剰な愛着」とも定義するが、これは本当にその通りだ。我々は、人間関係に愛着を持ち（多くは感情的な「必要性」に基づいている）、信念、現状、業績、マナー、そして、物質的な「物」一般に愛着する。「必要」と認知

したものにより、愛着が形成されると、今度はその愛着したものを失う恐怖を抱えることになる。確たる根拠がなくとも、失うことがありうると思うだけで、それに従って爬虫類脳は現実を復号・解読（デコード）し、我々を「幸福」にしているものを失う恐怖で、常に不安な生活を送ることになる。爬虫類脳は、潜在意識で反応する「自動操縦士」であり、人間の行動の相当な部分を決定している。

戦争を起こし、「競争」に勝とうとし、自らの意志を他者に押し付け、邪魔になるものは何でも潰そうとしているのは、爬虫類脳である。「潜在意識」という部分を強調しておきたい。これまでの章で、私は人々が根源意識コンシャスネスに目覚めていないと書いたが、これは本書を貫くテーマである。ほとんどの人間の行動は、無意識の反応、プログラムされた反応であり、自動操縦士である爬虫類脳を通じて発生している。

典型はブレア元英首相
爬虫類人血筋「私は望むものを得るため嘘をつく。何が悪い」

それからもう一つ。イルミナティの血筋と、彼らと遺伝子的に関係のある代理人は、並外れた嘘つきである。彼らはいつも嘘をつく。何もかも嘘である。彼らは、嘘と欺瞞ぎまんで、彼らの目標を正当化し、互いに嘘をつき、騙し合だまっては、油でベトベトした権力と地位の柱をよ

じ登っていく。私はトニー・ブレアのことを遺伝子的な嘘つきと表現したが、血筋の人々に
ついては、まさにその通りである。

爬虫類脳は、生き残りのためならば何でもするし、生き残りのために必要と思えば、良心
の呵責なく嘘をつく。私自身の人生経験でも、そのような人と遭遇してきたが、彼らはあま
りにもひどい嘘をつき、それも無意識なので、彼らが嘘をついていることに気付くまでにし
ばらく時間が必要である。真顔でそんな大嘘をつけるはずがないと思ってしまうのである。
本当のことを話していないのではないかと誰かに指摘されると、ずうずうしくも激怒しなが
ら退散する。

嘘をつくことは、爬虫類脳の生き残りシステムの武器の一つである。トニー・ブレアは、
本当のことを言うことができない。本当のことを言えば、ジョージ・W・ブッシュと一緒に
牢屋に入ることになるため、彼は嘘をつくしかかない。そうすると、前の嘘を繕うために、新
たな嘘が必要になり、その繰り返しになる。爬虫類の遺伝子の濃い血筋の中では、あらゆる
爬虫類脳の形質が増幅されている。

人類も嘘をつくが、血筋とその親類にとって、嘘は人生そのものである。私は何度も繰り返
返し述べているが、こうした人々には恥という感覚はなく、そのために罪の意識や感情の動
きもなしに、嘘をつくことができる。爬虫類脳は「私は生き残る必要がある。だから嘘をつ

く。何が悪い？」と言う。

爬虫類人の血筋は「私は望むものを得るために嘘をつく。何が悪い？」と言うのである。

竜座
ドラコの爬虫類人（過酷）が最も冷酷で暴力的破壊的

爬虫類人に関連する詳細情報は、『マトリックスの子供たち』（邦訳『竜であり蛇であるわれらが神々（上・下）』徳間書店）、『大いなる秘密』（邦訳『大いなる秘密（上・下）』三交社）、『デーヴィッド・アイクの世界陰謀ガイド』（邦訳『恐怖の世界大陰謀（上・下）』三交社）などの著作に書いているので、ここでは全てを繰り返すことはしない。点と点を結び、絵を浮かび上がらせるために必要な範囲で述べていきたいと思う。

ハイブリッド血筋の種は、古代・有史以前の世界において、「（複数の）星から来た」非人類と人類の遺伝子を結合して誕生した。（全てではないかもしれないが）少なくとも多くの人間の形態を持つ種は、こうして出現した。これは世界中に残る伝説や先住民の言い伝えに共通するテーマであり、ほとんどどこに行っても似た話がある。「ズールー」という言葉はそれだけで「星の子供たち」という意味を持つが、ほとんど全ての先住民文化には、人間と交流し、交配した「星の人々」といった類の伝説や物語がある。これが、古代から現代に至

る神々の起源である。

この宇宙にいたるのは我々だけであり、我々が知るような形態の生命は、この小さな太陽系の小さな惑星だけに存在するという考えは異常であるが、心を溶接して閉ざしている科学界はそのように考える。ブルガリア政府の科学者は、わざわざ2009年に「エイリアンは地球上にすでに存在している」と発表し、そのエイリアンと接触しているとも述べた。ブルガリア科学アカデミーの宇宙研究所のラチャザール・フィリポフ副所長が、「現在、我々の周囲のあちこちにエイリアンが存在し、いつも我々のことを監視している」とブルガリアの報道機関に述べ、この話を確認している。これは古代の人々が言っていたことだ。

古代人は、エイリアンのことを「監視人」と呼んでいた。さらにブルガリアの科学者は、ET（地球外生命体）と接触しており、彼らが提示した30件の質問にエイリアンたちが回答している途中だと言った。フィリポフの宇宙研究所は、その質問に対する回答として送信されたと思われる複雑なシンボルの組み合わせを解読中であり、世界中の150件のミステリー・サークルを分析しているという。

地球を訪問している非人類の集団は多く存在するが、地球の陰謀に最も関係している種は爬虫類の形態を取っており、それが、今日の世界の金融、政治、ビジネス、政府、軍、医療、「科学」、「教育」、関連する組織を支配するイルミナティ血筋の種をまいた。それだけでなく、

我々が知っているような人間の形態を作り出したのも彼らであり、遺伝子操作を行って爬虫類の遺伝子を注入し、それを通じて、奴隷種であるホモ・サピエンス、そしてそのアップグレード版であるホモ・サピエンス・サピエンスを操ることができた。奇想天外だろうか？ 考えてみてほしい。

宇宙には爬虫類の種がたくさん存在しており、さまざまな形態・品種がある。人間のような姿で緑色の鱗状の皮膚を持つ種もいれば、色素欠乏で白い種もあり、尻尾や角、さらに翼がある種も存在する。人類を操作している種のように邪悪な種もいれば、慈悲深い種もおり、多くはその中間である。

その拠点は、北の空の竜座ドラコ（ドラコは、竜を意味するラテン語で、過酷ドラコニアというふさわしい言葉のもとになっている）、北斗七星（大きな柄杓ひしやく、鋤すきとも言い、天空で竜座と同じ領域にある）、オリオン座など多数ある。

ズールー族の歴史家、クレド・ムトゥワは、ドラコの爬虫類人が最も冷酷で暴力的・破壊的な種であると言っており、これは私が多くの人から得た情報と一致する。この種は、自身のことを「王族」と思っている。ズールー族の伝承では、彼らのことを「ノンモ」と呼び、竜座は「カヤンノンモ」つまり、ノンモの故郷と言われている。「彼らは、悪臭を放ち、ネバネバして醜い」とクレドは言う。そして、このノンモが最も畏怖いふされている。アフリカの

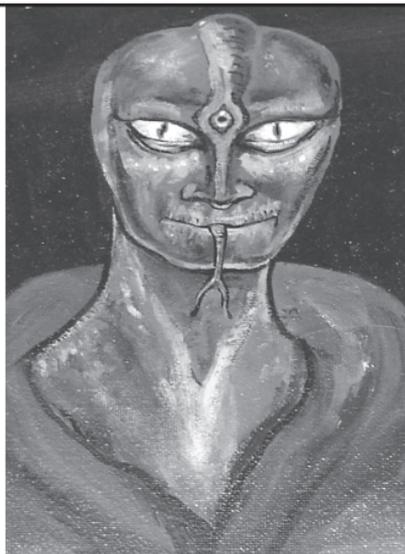


図85 86 爬虫類的な存在にはさまざまな種類が存在するが、ズールー族のシャーマン、クレド・ムトゥワと、イギリスの画家、ヒラリー・リードが、古代の伝承および現代の情報に基づいて描いた二つの例。

人々は、絶対に竜座を指差してはいけないと教えられるとクレドは言う。

もう一つのテーマとして、いくつかの爬虫類人の種族・派閥が、互いに支配と権力をかけて戦っているという話がある。特に好戦的で支配するのが大好きなドラコ種（ノンモ）については、その通りである。さまざまな爬虫類人の種族には、見た目や行動がまったく異なるものがある。簡略化のため、本書では「爬虫類人（レプティリアン）」と呼ぶことにするが、実際にはさまざまな派閥・集団・遺伝子タイプが存在する。一つの集団が爬虫類人の全体を代表しているわけではない。チャールズ・マンソン（アメリカのカルト教主で殺人犯）が全アメリカ人を代表するわけでなく、切り裂きジャックが全イギリス人を代表するわけではないのと同じである。

人類は彼らのエサ！レプティリアン 第三密度
人類操作の爬虫類人は可視光線領域外の「次元間存在」 第四密度

通常、人類を操作している爬虫類人は、いわゆる「可視光線」領域（我々の肉眼で見ることのできる周波数帯域）には住んでいない。多くの場合、人間の可視領域から少し外れた次元で活動している。だが、彼らは、その自分たちの「世界」と人間の「世界」を行き来することもできる。その性質からして、私は彼らのことをET（地球外生命体）とは言わず、

「次元間存在」インタレイメンションナル

と呼ぶことが多い。我々人類の「現実」は「第三密度」として知られているが、爬虫類人は「第四密度」から人間社会を操っている。この第四密度は、現在のところ我々が復号して「見る」ことができない周波数領域に共鳴している。我々の現実よりも密度が低く、まったく様子が異なるが、それでも「物質」世界であることに変わりはない。そこでは、我々のように「固形」の食べ物は摂取せず、エネルギーの形態で栄養を摂取している。第四密度は我々の第三密度に似ており、偉大な愛、調和から、問題の爬虫類人の派閥のような権力・支配欲、彼らの心ハートに相当するものに存在する憎悪まで、あらゆる状態が揃っている。この権力・支配欲が、彼らの本当の姿を表している。彼らは、不安でたまらないし、恐怖でいっぱいなのである。

我々は、考えたり、感情を持つとき、エネルギーを生成しており、その思考や感情の性質が、生成されるエネルギーの振動共鳴を決める。爬虫類人は、その存在状態からして、第四密度内では非常に低い振動の存在であり、そのために、彼らは自らと「同調」する低い振動のエネルギーを食糧にする必要がある。このエネルギー（彼らにとってはエサである）こそが、人類が恐怖を抱くことで生じる低い振動の思考と感情である。恐怖だけでなく、ストレス、落ち込み、心配、罪悪感、怒り、憎悪など、さまざまな感情が含まれる。だからこそ、現在の世界はそうした状態に満ちていると理解できるのである。